

学生の意見，アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その4

—解決志向セラピーの質問方法を用いて—

相模 健人(教育心理学教室) 渡部 光 (教育学研究科学校教育専攻)

A study of an improvement in the teaching methods. Fourth report. -Utilizing Solution-Focused-Therapy for obtaining the student's opinions and their ideas-

Takehito SAGAMI, Kou WATANABE

I.はじめに

筆者はこれまで「学生の意見，アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その1～3」(相模，2003a，2003b，2004)^(1, 2, 3)において，解決志向セラピー(Solution-Focused-Therapy)の質問法を用いた授業研究を行ってきた。本研究でも引き続き，愛媛大学教育学部の教職科目A必修授業「教育相談論」の授業において，解決志向セラピーで用いるスケーリングクエスチョン(Scaling Question)を用いた学生の授業評価を行い，学生の意見を取り入れた授業方法改善の過程を検討し，大学におけるよりよい授業のあり方について考察する。

また本研究では本年度前期に行った授業研究の結果⁽³⁾と比較し，前期から授業評価が改善しているか否かを検討していきたい。

II.方法

1. 授業について(平成15年度後期)

- ①授業名：教育相談論
- ②授業時間：毎週木曜2時限
(午前10時30分～12時00分)
- ③授業期間：平成15年10月2日～1月15日(計14回)
- ④受講登録者数：86名 教育学部新課程学生対象
- ⑤講義教室：教育学部総合授業研究室
- ⑥授業内容：授業内容は筆者のスクールカウンセラーとしての経験を生かし，システムズアプローチ，解決志向セラピーを用いたスクールカウンセリングを主に取

り扱った。授業形式は講義形式で14回行った。平成15年度前期の概要については相模(2004)⁽³⁾を参照頂きたい。

授業はマイク，ビデオ，プロジェクターといった視聴覚機材を必要に応じて用いた。具体的な内容は表1のようになる。前期の授業内容も合わせて示した。

前期からの改善点としては，次の3点が上げられる。まず，第2回講義に導入として「学校の実態について」と題して，現職教員を招き，筆者と対談形式で学校の実情について話した。次に，事例を先に提示し，その後の講義でカウンセリング理論を扱う講義構成に再構成した。また，第8回講義以降の事例を扱う講義では小グループでの討論を積極的に取り入れた。

2. 授業評価について

各授業時間の終わりに「授業評価シート」を配り，学生に授業評価を行った。「授業評価シート」は出席，遅刻票の役割をかねており，学生に記入することを義務付けた。ゆえに記名式である。ただし出席，遅刻の別以外は学生の成績評価には全く使用しておらず，そのことを学生に周知している。

「授業評価シート」は3つの質問で構成されている。質問1は「今日の授業は1を『わからない』，10を『わかりやすい』とするといくつでしたか？数字で教えてください」であり，数値で答えてもらった。質問2は「今日の授業はどんなところがよかったから，質問1の答えの数になったと思いますか？」，質問3は「来週の授業で少

表1 平成15年度講義内容

回数	前 期		後 期		
	日付	授業内容 授業教材など	日付	授業内容 授業教材など	
第1回	4月17日	ガイダンス 担当決め	10月2日	ガイダンス 担当決め	
第2回	4月24日	スクールカウ ンセリングに ついて	10月9日	学校の実態に ついて	学生の意見をもとに筆者と 現職教員と対談
第3回	5月1日	スクールカウ ンセラーは必 要か否か?	10月16日	スクールカウ ンセリングに ついて	相談室の写真を回覧
第4回	5月8日	事例Ⅰ 問題行動	10月23日	スクールカウ ンセラーは必 要か否か?	ミニシンポジウム、学生が 討論、学生の質問をプリン トで配布
第5回	5月15日	システムズア プローチにつ いて その1ーシス テムズアプロ ーチの説明	10月30日	事例Ⅰ 問題行動	学生が事例を実演、プロジ ェクター使用、学生の感想、 質問をプリントで配布
第6回	5月22日	システムズア プローチにつ いて その2ー解 決志向セラピ ーの説明 事例Ⅱ いじめ	11月6日	システムズア プローチにつ いて	ビデオ使用、学生の感想、 質問をプリントで配布
第7回	5月29日	不登校は厳し く対応するか ? やさしく対 応するか?	11月13日	不登校は学校 に行かせるべ きか? 休ませ るべきか?	ミニシンポジウム、学生が 討論、学生の質問をプリン トで配布
第8回	6月5日	事例Ⅲ 不登校 その1	11月20日	事例Ⅲ 不登校 その1	学生が事例を実演、小グル ープでの討論、プロジ ェクター使用、学生の感想、質 問をプリントで配布
第9回	6月12日	事例Ⅲ 不登校 その2	11月27日	事例Ⅲ 不登校 その2	学生が事例を実演、小グル ープでの討論、プロジ ェクター使用、学生の感想、質 問をプリントで配布
第10回	6月19日	事例Ⅳ 相談 室登校 その1	12月4日	ソリューショ ン・フォーカ スト・セラピ ーについて 事例Ⅱ	学生同士でコンプリメント を実際に体験、プロジ ェクター使用、学生の質問を プリントで配布
第11回	6月26日	事例Ⅳ 相談 室登校 その2	12月11日	事例Ⅳ 相談室登校 その1	学生が事例を実演、小グル ープでの討論、プロジ ェクター使用、学生の感想、質 問をプリントで配布
第12回	7月3日	事例Ⅴ コンサルテー ション その1	12月18日	事例Ⅳ 相談室登校 その2	学生が事例を実演、小グル ープでの討論、プロジ ェクター使用、学生の感想、質 問をプリントで配布
第13回	7月10日	事例Ⅴ コンサルテー ション その1	1月8日	事例Ⅴ コンサルテー ション	学生が事例を実演、小グル ープでの討論、プロジ ェクター使用、学生の感想、質 問をプリントで配布
第14回	7月17日	教員の対応に ついて	1月15日	教員の対応に ついて	レポート課題について現職 教員と学生でディスカッシ ョン、学生の感想、質問を プリントで配布

しよくなって、質問1の答えより1上がったとしたらどんな授業になっていると思いますか？」であり、学生に自由に記述してもらった。その他として質問欄を別にもうけている。毎回の平均、代表的な感想と質問への回答を、次回の講義でプリントとして配っている。

3. 結果の処理

「授業評価シート」の質問1について、毎時間の平均を出した。そして、二要因の分散分析を行い、下位検定として各年度の一要因分散分析およびt検定を行った。

Ⅲ.結 果

表2に平成15年度前期後期の「授業評価シート」の質

表2 平成15年度前後期毎の各回の平均 (括弧内は標準偏差)

	前期	後期
第2回	7.24 (1.23)	8.03 (1.45)
第3回	6.64 (1.66)	7.38 (1.40)
第4回	7.92 (1.51)	7.45 (1.53)
第5回	7.67 (1.44)	8.28 (1.49)
第6回	7.26 (1.79)	7.66 (1.63)
第7回	7.33 (2.06)	7.55 (1.35)
第8回	7.79 (1.47)	8.14 (1.27)
第9回	8.10 (1.47)	8.66 (1.23)
第10回	7.56 (1.67)	8.34 (1.34)
第11回	8.00 (1.38)	8.14 (1.33)
第12回	7.62 (1.60)	8.34 (1.54)
第13回	7.56 (1.60)	8.45 (1.40)
第14回	8.41 (1.57)	8.79 (1.29)

表3 2要因分散分析の結果

変 動 因	SS	df	MS	F	
講 義 回 数	137.75	7.94	17.36	9.87	****
前 後 期	47.48	1	47.48	3.01	*
講義回数×前後期	27.14	7.94	3.42	1.95	*

****P≤.001

*P≤.10

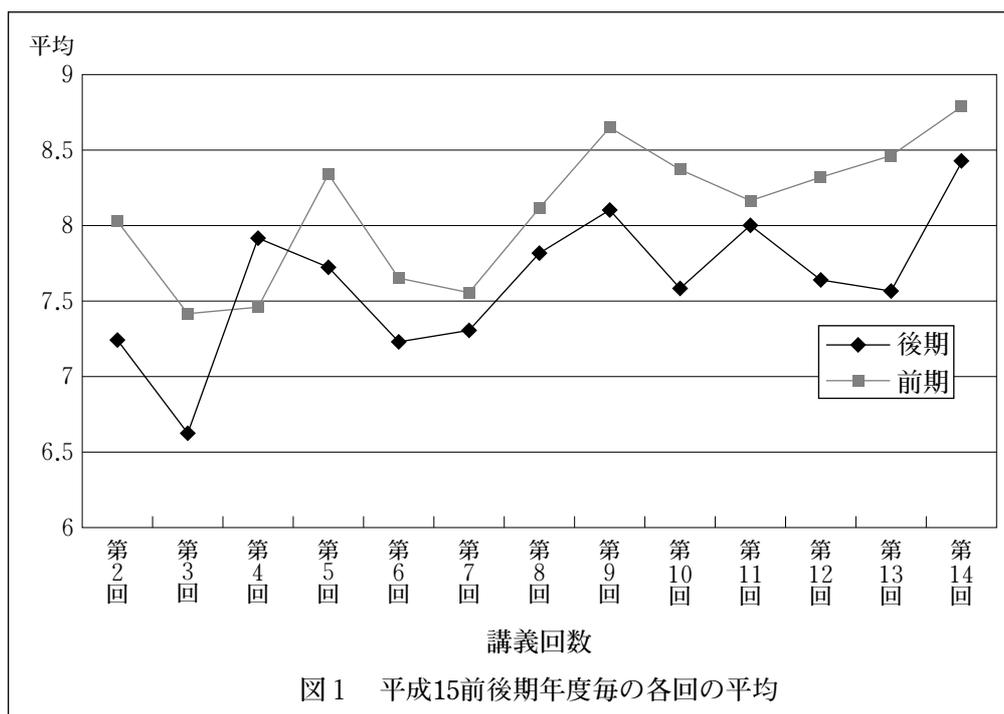


図1 平成15前後期年度毎の各回の平均

表4 平成15年度前後期間の1要因分散分析の結果

変 動 因	SS	df	MS	F
講 義 回 数	3.65	1	3.65	3.01

*
*P≤.10

表5 平成15年度前期1要因分散分析の結果

変 動 因	SS	df	MS	F
講 義 回 数	95.43	6.29	15.18	5.99

****P≤.001

表6 平成15年度後期1要因分散分析の結果

変 動 因	SS	df	MS	F
講 義 回 数	72.79	7.74	9.40	6.44

****P≤.001

表7 前後期間の t 検定

講 義 回 数	t 値	自由度
第 2 回	-3.27	146.01
第 3 回	-1.26	204
第 4 回	1.96	184
第 5 回	-1.05	114.31
第 6 回	-2.22	132.12
第 7 回	-1.20	187
第 8 回	-3.45	193
第 9 回	-1.67	190
第10回	-2.42	173
第11回	-0.66	179
第12回	-3.60	181
第13回	-3.58	178
第14回	-1.26	179

* P≤.10

** P≤.05

**** P≤.001

このことについて全講義出席者(前期39名, 後期29名)を対象に二要因の分散分析を行ったところ, 0.1%水準で講義回数の主効果, 10%水準で前後期の主効果, 講義回数×前後期の交互作用に優位差が見られた(表3参照)。

これについて, まず, 前後期の1要因分散分析を行ったところ, 10%水準で優位差が見られた(表4参照)。次に前後期別に1要因分散分析を行ったところ, どちらも0.1%水準で優位差が見られた(表5, 6参照)。前期では0.1%水準で第3回と第4回講義, 1%水準で第10回と第11回講義, 第13回と第14回講義, 5%水準で第2回と第3回講義, 第9回と第10回講義, 第11回と第12回講義, 10%水準で第5回と第6回講義で優位差が見られた。後期では0.1%水準で第8回と第9回講義, 5%水準で第2回と第3回講義, 第4回と第5回講義, 第5回と第6回講義, 第7回と第8回講義で優位差が見られた。

さらに出席者を対象に前後期間の各回のt検定を行ったところ, 0.1%水準で第2回講義, 第8回講義, 第12回講義, 第13回講義, 5%水準で第6回講義, 第10回講義, 10%水準で第4回講義, 第9回講義で優位差が見られた(表7参照)。

問1の結果を示す。グラフにした図1を見ると, 両期共に平均得点が回を追うごとにだらかに上昇して上がっていくことが理解できる。

IV. 考 察

表2, 3より本研究における授業評価は回を追う毎に上がっており、後期の結果に関しては後半が授業評価が高いまま、安定していると考えられる。筆者のこれまでの先行研究^(1, 2, 3)の結果と同じく、本研究での授業評価の方法が学生に受け入れられ、評価されていると考えられる。

また、表4より前後期の主効果も見られ、後期の方が学生からの授業評価が高い。前述した後期からの授業の改善点が学生の評価を得ていると考えられる。しかし、この点については前期が教育学部教員養成課程および障害児教員養成課程の学生を対象にした授業であるのに対し、後期では教育学部新課程の学生を対象にしており、学生の属性からの影響も考えられ、今後更なる詳細な検討が必要と考えられる。昨年度後期の「教育相談論」の授業においては、法文学部の学生も受講しており、学生の属性が混在しているため、来年度の授業評価結果を待ち、検討を行いたいと考えている。

ではどのような授業内容が学生には評価が高かったのであろうか。表5, 6の前後期別の一要因分散分析ではどちらも優位差があり、下位検査でも優位差が見られた。前期分についてはすでに先行研究⁽³⁾で考察を行っているので、ここでは主に後期分について考察したい。

後期ではまず第2, 3回講義について優位差が見られ、表1の授業内容から第2回講義の現職教員との対談形式の授業が学生には評価が高かった。これは第14回講義と同様に現職教員から直接、学校現場の実情が聞けることが評価されており、また講義全体の導入という観点からも、効果的であったと考える。

第4, 5, 6回講義では第5回講義の授業評価が高く、授業内で初めて事例を紹介したことによる新鮮さに加え、その事例は学生がカウンセリングに抱くイメージと大きく異なるものであったことが評価されたと考える。それに比べてミニシンポジウムや講義型の授業は評価が低く、更なる改善が望まれるところであろう。

第7, 8, 9回講義では回を追う毎に授業評価が高まっている。これは2週に渡り、事例を扱ったことにより、学生の興味がより膨らんでいったと考える。ほとんどの学生がカウンセリングでの経過を学ぶことにより、不登

校への対応を前向きに学んでいるものと考えられる。

その後は結果に多少の変動があるものの、授業評価は安定している。前期での先行研究⁽³⁾では、事例が続くことによる授業評価の停滞が見られていたが、その点が改善しているといつてよいだろう。これは事例を扱う授業で導入した「小グループでの討論」が定着したことによるものと、事例を先に扱い、後でカウンセリング理論を紹介する講義構成にしたことが評価されていると考えられる。これらについては今後も継続して授業の中で行いたいと考えている。

また、表6より講義回数と前後期の交互作用についても優位差が見られた。表7をもとにこれについて検討したい。第2回講義では表1を見ると、後期では前述のように現職教員との対談形式の授業の方が講義形式の授業よりも評価されていると考えられる。第4回講義では前期の方が授業評価が上回り、これも前述の通り事例を紹介したことが講義形式よりも評価されている。

第6回講義では同じ講義形式の授業ではあるものの、前期では「学生同士でコンプリメントを実際に体験」が含まれており、これが以前から学生に不評であった。今後は他のワークに差し替えることが求められる。

第8, 9回講義では前後期とも同じ内容の授業であるが、前述した「小グループでの討論」が学生に評価されている。「授業評価シート」の感想からも、学生は授業に積極的に参加したいと考えている。大人数の授業では全学生の参加が難しいところもあるのだが、「小グループでの討論」から学生の考えを集約していくことが今後求められるだろう。

第10, 12, 13回講義は前期では授業評価が停滞しているが、後期では前述の通り、授業評価が高いまま安定しており、前期からの改善がよく現れていると考える。学生の感想も前期では「マンネリ」と述べる学生が多いのに対し、後期では「授業形式が定着してきた」と述べる者が多かった。

最後に今後の課題を述べる。前述した学生の属性による比較が必要であろう。前後期で授業評価は改善しているが、単に授業方法の改善によるものと結論付けるのは早計であり、詳細な検討を今後、行っていきたい。今後も筆者はさらなる授業改善に取り組み、その成果を研究として報告していく予定である。

引用文献

- (1)相模健人 (2003) 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その1ー解決志向アプローチの質問方法を用いてー 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第49巻 第2号 57-77.
- (2) 相模健人 (2003) 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その2ー解決志向セラピーの質問方法を用いてー 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第50巻 第1号 77-84.
- (3)相模健人 渡部光 (2004年)学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その3ー解決志向セラピーの質問方法を用いてー 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第50巻 第2号 83-88.